

ほんしょう 内科クリニック

〒551-0032
大阪府大阪市大正区北村2-5-10
TEL: 06-6551-3168
URL: http://honsho-cl.com/



院長：本庄尚謙先生
Honsho, Shoken

スタッフ

医師：常勤1人
(日本糖尿病協会療養指導医)
看護師：常勤3人(うちCDEJ1人)
受付：常勤3人
CDEJ：日本糖尿病療養指導士

指導・活動内容

外来、糖尿病教育入院、糖尿病教室、病診連携、栄養指導、服薬指導、フットケア

施設・設備

糖尿病を扱う内科としては一般的ですが、大画面テレビや雑誌・書籍を多く配置しており、来られた患者さんが少しでも癒され、リラックスして過ごせるような広めの待合にしています。待合の広さを活かして定期的に糖尿病教室を行っております。

検査体制

心電図、X-p、ABI(足関節上腕血圧比)、超音波検査、SAS(睡眠時無呼吸症候群)簡易検査、ホルター心電図、24時間血圧計

(2017年2月現在)



循環器内科医の立場から、 糖尿病とその合併症に立ち向かう

大阪市の南西部、大阪湾に面している大正区に「ほんしょう内科クリニック」はある。江戸時代に新田開発がさかんに行われ、明治時代以降は埋め立てが進み紡績工場や造船所などが続々と建設された地域である。前任の医師から引き継ぐかたちでこの地に開業された本庄尚謙先生は、循環器内科を専門として経験を積んでこられた。その本庄先生がクリニック診療の大きな柱のひとつに糖

尿病を据え、関西電力病院の医師や医療スタッフと組んで、クリニックにおいて出張糖尿病教室を実施しているのは、どのような理由からだろうか。

今回は、出張糖尿病教室のメイン講師でもある関西電力病院 糖尿病・代謝・内分泌センターの田中永昭先生を訪問者として、本庄先生とクリニックスタッフとが目指す糖尿病診療を探っていただいた。



- ①：院長の本庄尚謙先生「高齢の方々、これまでの日本を支えてきた方たち、できるだけ苦しくないように最期のときを迎えられるようサポートしたいんです。働き盛りの30~50歳代の方たちには、できるだけ病気にならず元気ではたらいはしい。循環器内科というのは、糖尿病から合併症になって心筋梗塞などで最終的にたどり着くところでもあるんです。末期の悲惨さを間近に見てきた分、「そうなってはほしくない」との思いで出張糖尿病教室も始めていただきました。検査データが悪いまま放置しているとどうなるのかを、より実感をもって具体的に患者さんに伝えられるのは、わたしの強みかもしれないと思います」
- ②：元永真由看護師「本当は、30~40歳代くらいの若い人たちにこそ年に1回くらい栄養指導を受けて、今後に向けて生活習慣を見直す機会にさせていただきたいですね」
- ③：出合七重看護師「高齢者の患者さんには「健康寿命」をできるだけ伸ばしていただけるように支えていきたいと思っています」
- ④：本庄貴子看護師「患者さんの生活の幅を狭めずに安心して相談ができ、病気を予防し進行させないお手伝いをしていけたらと考えています」



①②：出張糖尿病教室の様子。田中先生(①)と、関西電力病院 疾患栄養治療センター 管理栄養士の松本裕一郎先生(②)。田中先生は「何れともあれ食事療法」のタイトルで、どうして糖尿病において食事療法が重要なのかをさまざまなデータも織り交ぜながらわかりやすく解説された。松本先生は「これならできる! 糖尿病の食事療法」と題して、より具体的にどういふふうにご飯・食品を選ぶべきかを解説された。本庄先生「この出張糖尿病教室は、関西電力病院の矢部大介先生の講演をうかがいに行った際の懇話会で「こんなことでできませんか」と思い切ってお話してみたことがきっかけで始まりました。現在は参加者全員が当院に通院中の患者さんですが、糖尿病の方だけが糖尿病の話を開くのは、必要だけれど十分ではなく、予防が大事なので将来は外部からも聴講していただけるようにしたいですね」



③④⑤：診察室。3台ならぶモニターはすべて切り替え可能で、左は主にX線写真などの画像データ表示用。真ん中は検査データなどを表示し、右はスタッフが投薬情報などを入力する。訪問時期が年末だったので、かわいい飾りも(⑥)。



⑦：処置室。循環器内科をメインに据えていることもあってか広々とした作りで、糖尿病メインのクリニックとはまた趣きがある。

医師・医療スタッフの視点

訪問者 田中永昭 Tanaka, Nagasaki 先生
所属 関西電力病院 糖尿病・代謝・内分泌センター



循環器内科視点の糖尿病診療

一合併症予防に注ぐ情熱一

長年循環器内科の専門医として医療に携わってこられた本庄先生には、もしかしたら糖尿病専門医が心配する以上に糖尿病合併症に対する危機感が強いかもしれません。循環器疾患の患者さんは糖尿病でもある場合が多く、糖尿病から合併症へ進まないよう先手を打ちたい思いに駆られていらっしゃるのでしょう。その情熱が、出張糖尿病教室の実施や、緊密な病診連携、クリニックスタッフとのチームとしての団結の強さに結びついているのだと思います。

地域住民との深いつながり—くつろぎと信頼と—

糖尿病教室の最後に質疑応答の時間がありますが、参加された多くの患者さんが活発に発言されます。これは、本庄先生やスタッフのみならず日頃の診療やかがわりのなかで、医療者と患者さんとの強い信頼関係を築いている証だと感じます。本庄先生の朗らかな人柄が、話しやすくアットホームな雰囲気づくりに生きていますね。

目的を共有したチームワーク

一少人数でこそ生まれる阿吽の呼吸一

病院に比べれば小規模のクリニックだからこそ生まれ出せる、息の合った深い信頼関係が素晴らしいですね。看護師さんが引き出した患者さんの情報をさり気なく本庄先生に伝える連携や、診療がふと途切れたわずかの時間に、気になる患者さんについてのミニカンファレンスのような会話が生まれるというお話しが印象的でした。「すべては患者さんのため」という目的、それから本庄先生の「合併症をなんとしても防ぎたい」という情熱がしっかりと共有されているため、スタッフ間で気軽に話し合える関係が生まれ、その雰囲気は患者さんとの関係にも還元されているのだと思います。



⑧：ほんしょう内科クリニックのみなさんと田中先生・松本先生。田中先生「これまでも出張糖尿病教室ではほんしょう内科クリニックを訪れてはいましたが、今回改めて本庄先生やスタッフのみなさんのお話をうかがい、クリニック全体のチームワークのよさを実感しました。これからも糖尿病教室や病診連携を通じて関係を深めていけたらと思います。どうもありがとうございました」